



長洞元気村ニュース

平成23年6月25日

復興 第7号



私が長洞に係わることになった訳

濱田甚三郎

仮設市街地研究会代表の濱田甚三郎です。代表とは名ばかりで仮設研の仲間に支えられ、また長洞の皆さんの笑顔に支えられて活動を続けてきています。

私が今回の震災で、なぜこの様に動き始めたのか、その理由を少しお話させて下さい。

2つあります。1つは、私が紀伊半島の海辺育ちで、終戦直後の昭和20年8月27日、水産加工問屋の3男坊として生まれました。家業は現在6代目が継いでいます。

私の実家にかつて住み込みの鯉節職人が何人かいて、そのうちの一人に、東北弁の人がいました。立派な体格の人で私はその人に大層かわいがってもらい、小学校に上がる前は、毎日のようにゴエモン風呂に入れてもらっていました。家業の水産加工業では、東北の方々との取引もあった様です。そうしたことから、海に、海で生きてきた人の復興の力になりたいと強く思うようになりました。

酒と男と羞恥心

「何か必要なものはありますか。ガソリンは無理ですが・・・」森反教授からの電話である。私は「車はガソリンで走りますが、私はお酒がないと動けないんです。」と答えた。教授は大笑いしながら「今度持っていくよ。」と言った。家屋・家財とともに、あったはずの男としての奥ゆかしさや羞恥心まで流失してしまったようだ。教授は約束どおり一升瓶をぶら下げてやってきた。一献の味は忘れられない。お願いである。今も続く酒での失態やご無礼の数々、千年に一度の大災害に免じて水に津波に流してほしい。

いま1つは、私の恩師吉阪隆正（故人、早稲田大学教授）のDNAです。1965年1月11日に伊豆大島元町を襲った大火は、強風、水利の悪さなどから約15ha、340戸を焼失させました。大火の翌日、吉阪とその弟子達は元町再建案を作成、ただちに現地にとび、地元住民組織、町、都の関係者に提出。それが1970年まで続く、元町復興計画・事業のスタートとなりました。吉阪には1974年、私の首都圏総合計画研究所の初代理事長を務め

ていただきました。（現在は株式会社になっています。）そうした縁からか、私は阪神・淡路大震災、中越地震だけでなく、トルコ、台湾、パキスタン、中国・四川の地震に係わりを持つだけでなく、東京の事前復興（震災に襲われる前に、都市や市街地を強化しておくこと）にも関与するようになりました。

特に阪神・淡路大震災時には、多くの方が避難所の寒さに耐える中、仮設住宅が足りないという事態で、中古コンテナを住宅や店舗・工場などに改造し、それを並べた仮設市街地をつくろうと活動したことがあります。それが私達の仮設市街地研究会のルーツで、今回の「仮設市街地・集落」づくりの提案並びに長洞での活動に結びついていった訳です。少し長話になりました。

長洞元気村建設の目途はつきましたが、次は長洞元気村をより充実したものにする事、さらには住宅再建と漁業の復興に取り組まなければなりません。引き続き、お手伝いをさせて下さい。